

『三葉集』

田漢・宗白華・郭沫若著

その2とその3 「郭沫若より宗白華への手紙」

原題：「郭沫若致宗白華」

顧 文*

岩佐 昌璋**

Kleebatt by Tian Han, Zong Baihua & Guo Moruo

Letters to Zong Bai hua from Guo Moruo No.2&No.3

With Annotation

by

GU Wen, IWASA Masaaki

(Received October 31, 2013)

【その2】

白華兄：

寿昌兄【田漢を指す】の手紙には、もう返事をしました。この前の手紙で、君は僕の古い詩を読んで、僕の境遇にひどく悲しい気持ちになったと書いています。君は、「もうこれ以上このことに触れるのは耐えられない」とも書いています【補注1】。君はそう言ってくれますが、僕は逆に全て告白しておかなければいけないと思いました。そうしなければ、どうしても君を欺くことになり、同時に自分をも欺いてしまうという感じがするのです。君はいつかある時きつと失望するでしょう。僕にとっても将来悔恨を一つ加えることになるでしょう。ですから、寿昌兄に宛てた手紙を君にも送り、目を通して頂きたいと思います。

僕は「天上の序曲」(Prolog im Himmel)を訳した後【補注2】、ついでに「献辞」(Zueignung)も訳してみました¹。ゲーテのこの詩は僕の現在の心情

を十分に表しています。

昔、私の朦朧たる眼中にかつて現われていた幻影が、いままた近づいてきた。

このたびは君達を必ず上手く捉えることができまいか？

私には感じられる、私の心はいまなおその夢の世界に傾きつつあるかと？

君達は私の胸に迫ってくる、どうぞ、来たまえ！

君達はできるだけ雲の中、霧の中のように、僕の周りで舞い上がれ！

私の心の旗は青春時代の揺れと衝撃を感じている、君達の行列を取り巻く神風は、また私の心の旗を吹き揺らしている。

君達は幸福な時代のスケッチを手に、

愛すべき虚像と一緒に現れてきた；

初恋の心、初めて結ばれた友情、

まるで半ば忘れていた古い物語のような輪郭；

す。

* 東海大学経営学部観光ビジネス学科教授

** 九州大学名誉教授 熊本学園大学特任教授

¹ 『ファウスト』第一部「天上序曲」の前にある『献詩』を指

苦痛は更に新たに、
迷い道や邪道に行き間違えた生涯を再び訴え、
あの幸福なよき日に騙された善人の名を再びもち出し、
これらの善人の名をもはや私の眼の前から消しつくした。

私の前半の靈魂を聞いたことがある、
私の後半の歌唱は聞こえてこない；
過ぎし日の歓宴はすでに離れ散り、
消え去ったものは！ああ、昔日の共鳴だ。
私の歌詞を見知らぬ人々に歌い、
彼らの賞賛の声は却って私の心が痛むことに、
かつて私の歌を楽しく聞いた友人、
たとえこの世に居ても、すでに世界中に散り去り。

端正、静かな厳しき霊の世界、早くも忘れ、
あの敬仰の懇意がまた私の胸襟をつかみにきた、
私の精微な歌は定まらない一つ一つ音が揺れ動く、
まるでアイオロスの琴線から流れてきた哀楽¹、
戦慄に耐え難く、涙が次から次へと湧いて来る、
かたくなる心も和みやわらげる；
私が今持っているものも 遙かにかなたに遠のき、
消え去りしものも 私のため、その姿を現す。

ゲーテの詩を読んで、限らない Resignation 【諦念】を感じています。『エッケハルト』(Ekkehard)を読んだ君の感想は、まさに僕の言いたかったことにほかなりません！【補注3】僕が忘れられないのはすなわち過去です。僕はしばらく前に『嘆逝』【去りゆくものを嘆く】という詩を作りました²。

(一)
涙で潤みかすんだ太陽、
愁眉で広がらない大空、

¹ 郭沫若が訳した『ファウスト』の注に「アイオロスは、本来ギリシャ神話の中で風の神である。ここではハーブの一種である」とある。

² この詩は最初1920年2月16日の上海『時事新報・学灯』に発表された。

冬の日が別れようとしているのを残念がっているのか？
春の日がなかなか来ないのを残念に思っているのか？

(二)
岸辺の船の中で眠っているあの灰色の少年は、
僕の身体ではないか？
ポケット版ハイネ(Heine)詩集一冊が
彼の顔をすっぽり覆っている。

(三)
潮騒 低く起こり、
まるで彼に代わってすすり泣きをするかのよう、
まるで彼に代わって訴えかけているかのよう、
彼の無限の情緒を引き出す。

(四)
彼は冬の日が離れようとも残念には思わない、
彼は春の日がなかなか来なくとも残念がりはしない、
彼はただ誤ち躓いた青春が、
永遠に過ぎさってしまうのを無念に思うだけ。

君が必要としているドイツ語の書籍を今度調べてみます。最もいいのは君が読みたい書籍の名前を送ってくれることです。本屋にあれば、買って差し上げるし、ない時には、「丸善」に頼んで、直接ドイツへ発注してもらいます³。これで、如何でしょうか？【補注4】

僕にはもう一つお願いしなければいけない事があります。この前、君の手紙に、新聞社が僕に若干の墨洋【鷹洋とも呼ばれ、近代中国で流通していた貨幣】を送ろうとしていると書いてありました。どういう名目でしょうか、僕の報酬として下さるのですか？僕が送っていたものには、一つとして報酬を受けとる価値のあるものはありません。僕の本心も、もともと報酬をいただく意思は全然ありません。白華兄！もし君が僕を愛しているなら、僕のような悪い精霊、骨の髄まで浸み込んでいる罪を軽蔑しないなら、その話を取消して下さい！これ以上

³ 東京にある洋書を販売する書店。

に恥かしい思いをさせないでほしいです！

最近の『学灯』のコラムの中では仲蘇君【黄仲蘇(1896～)安徽省の人。初期の白話詩人。後『創造週報』にも寄稿している。南京の東南大学で文学概論を講じた】の『問心』が最も好く¹、まるで僕の心に問うているように感じます。

『創化論』はとっくに読み終えました²。アンリ・ベルクソンの思想はゲーテより脱胎してきた感じがします³。およそ芸術家たる人は、彼の「生の哲学」に傾きやすいように思います。

沫 若 九、二、十五

【民国9年、大正9年、1920年】

【その3】

白華兄：

昨夜、僕は手紙を一通書きました。まだ郵送していませんが、今朝、学校に来て、君からの手紙を受け取りました。はじめて自分が以前起こした事件について、時珍【魏時珍(1895—1992)。郭沫若の成都高等学堂時代の同級生、数学および物理の博士号を有す】がすでに君に話していたということを知りました。君と時珍はまったく僕の旧悪を咎めようとしていませんが、これからの僕はただ努力、奮闘を以て以前の罪を償いたい、そして親友達の熱い友情に応えられるよう務めたいと思います【補注5】。前回君に出した手紙を、君は僕のために公表してくれましたが、まさに僕がそうしたいと願いながら、できなかったことをやってくれたと思っています。だからどうして“君を責め”たりしましょう【補注6】？僕は

常に自分がアウグスティヌス⁴、ルソー⁵、トルストイ⁶のような天賦の才を持っていないことを悔しく思っています。僕はすべてを赤裸々に曝す『懺悔録』を書いて、世間に告白することもできません。だが僕の過去のすべてを全面的に吐き出して、きれいにしなければ、僕の将来も結局過去の暗い影に包まれてしまい、完全に広がる希望がないのです。僕の罪の重荷を早く卸してしまわないなら、僕のあの可哀そうな魂はついには涙の海で疲れ果て、解脱する日は来ないでしょう。以前僕は自分自身に対する解決方法として、ただ「死」そのものに狙いを定めていました。しかし今僕はこの最後の手段を捨てました。生きる道へ歩こうとしています。僕の過去の生活は、ただ暗黒な地獄で幽霊と化していました。僕の今後の生活は、光明の世界で人としてありたい。白華兄！あなた方は、僕の彼岸の灯台で、永遠に僕にその光を下さるよう！そうすれば僕は早く救われることができるでしょう！

—— Den Drang nach Wahrheit und die Lust am Trug.⁷

——真理を追い求め、夢境に楽を探す。

ゲーテの言葉は、僕には、われわれの若者の矛盾した心理を言い尽くしているように思えます。真理は探究しなければならぬし、夢境も探さなければいけないのです。理智は拡充しなければいけません、直感も放棄するには忍びません。これは単に中国人の遺伝的頭脳だというだけではありません、これは確かにすべての人間の共通の天性になります【補注7】。ゲーテの一生はたださまざまな矛盾した面の結晶体にすぎませんが、しかし正にその「完璧」たる所以も失われていません。僕はこのように考えました。僕たちは必ずしもどれかが優れている必要はない、またなんでもかんで

この手紙は最初1920年2月24日上海『時事新報・学灯』に発表された。同年3月15日出版の『少年中国』第一巻第九期に掲載。後に、作者の修訂を経て、1925年12月に上海光華書局出版の『文芸論集』に収められた。また1995年に人民文学出版社の『沫若文集』第十巻に「論詩三札・三」の題で収録されている。

¹ この詩は最初1920年2月10日の上海『時事新報・学灯』に発表された。

² 『創造進化論』のこと。

³ Henri Bergson(1859—1941)。フランスの観念論哲学者で神秘主義者。彼は絶えまなく進行し続ける生命力が人類生活の根本であり、すべての世界が「生命の動く」より実現できた「創造的な進化過程」であると考えている。著作に、『創造進化論』等がある。

⁴ Aurelius Augustinus(354—430)。ローマ帝国キリスト教の思想家で教父哲学の主要代表の一人。著作に、『神の国』、『懺悔録』等がある。

⁵ Jean Jacques Rousseau(1712—1778)。フランス啓蒙主義思想家、文学者。著作に、『民約論』、『懺悔録』、『エミール』等がある。

⁶ Leo Tolstoy(1828—1910)。ロシア文学者。著作に、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』等がある。

⁷ ドイツ語。『沫若文集』は、「真理を追い求め、夢境に楽を探す」と訳す。これは『ファウスト・劇場での前劇』詩の一句である。

もいい、という必要もない。理智の拡充が望ましい所は、僕らはできるだけ拡充していくべきだし、直感の運用が望ましい所は、それもできるだけ運用していくべきだと思います。更に孟子の言葉に倣って言うと、即ち「願う所はすなわちゲーテに習うこと也」¹です。君も僕のような意見に賛同してくれるのではないのでしょうか？

詩詞に対して僕は具体的な研究をあまりしていません。僕は形式を最も嫌う人間です。平素からあまりそれを重んじていません。僕の書きたいいくつかも、ただ一時的な衝動にかられて、気ままに飛んだり、跳ねたりしたものにすぎません。ですからそれがようやく出来上がると、いつも胸いっぱい嬉しさがこみ上げるのですが、二、三日も経って自分でもう一度反復して読み返してみると、今度はびっしょりと冷や汗をかかずにはいられません。ただ僕自身、詩に対して直感的に、「自然な流露」こそ最上であると感じています。もし「人工の技巧」に出たものであるなら、園芸盆栽のようなものに過ぎないし、やむなく金持ちの弄ぶ観賞用のものになるよりほかありません。自然界の現象は、大きくみれば寥々として人の足跡もない森林のようで、細かくみれば道端や畦道に咲く草花のようです。動きという面からみれば広い海の広大な涛のようであり、静寂の点から言えば、山の泉や清らかな露のようです。怒れば雷鳴と稲妻が入り混じっているようであり、喜べば星と月のように明るく美しいのです。何一つ自然な流露の現われでないものはないのです。何一つ平民に公にしてそのなり行きに任せないものはないのです。アリストテレスは「詩は自然を模倣するものだ」²言っています。僕はアリストテレスのこの言葉は、写実家【リアリスト】のいわゆる描写に忠実なれという意味にとどまらず、詩の創造には「自然な流露」が大切だと言っていると思います。詩の生成は、ちょうど自然物の生存と同じで、いさ

さかも「人工の技巧」を混ぜてはなりません。新体詩の生命もそこにあると僕は思います。古人が彼らの言辞を用いて彼らの心情を表現したものは、既に古詩であり、今日の人が僕たちの言辞で僕たちの生活の楽しみを表現したものが新詩なのです。さらにまた何代かを経たら、もっと新しい新詩が出現するでしょう。

君の詩の定義は確かに少し「範囲が広い」ものです。それを詩ではなく文学の定義とすれば、より適切だと思います【補注8】。なぜならば、「意境」【芸術で表現された思想感情】がかつて制限を加えられたことはないからです。近年来、詩の領土はますます狭くなっています。叙事詩、劇詩もすべて詩の領域から飛び出して、散文に占領されてしまいました。詩の本職はもっぱら抒情にあります。抒情の表現はたとえ詩の形を採らなくても、詩の本質は失われません。例えば近代の自由詩、散文詩はいずれも抒情的な散文です。自由詩、散文詩の建設も、まさに近代詩人が一切の束縛を受け入れることを願わず、一切の既成の形成を打ち破り、もっぱら詩の神髄を汲みとって、その自然な流露に便ならしめるための一種の表現です。しかし、自然な流露の中でも、当然自ずからその自然の喜び、自然の画意が存在しています。なぜならば情感自身がもともと音楽と絵画の二つの働きを備えているからです。情感の音階、情感の色彩、すなわち詩です。詩の文字は、すなわち情感それ自身の表現（人の力を借りて情感を表示するものではない）です。僕から見れば、この体相一如【本質と表現が一つになる】の境地に達した時に、やっと真の詩、良い詩が出現すると思います。

詩はすべての文学の中で最も早く発生したものです。たとえ民族の方から、また個体の方から考えても、その手がかりを得ることができます。原始人と幼児の言語は、いずれもわずかながら詩の表現です。原始人と幼児はすべての環境に対して、いささか新鮮な感覚を持っているにすぎませんが、その感覚から一種の抵抗することのできない情感を発し、その情感から一種のメロディのある言語を表現するのです。この種の言語の生成は詩の生成と同じです。だから抒情詩の中で最高のものは一部の俗曲や民謡です。たとえば僕自身の息子でも、天にかかる月を見て、指さしながら「Oh, Moon !

¹ 孟子(前372? - 前289)は、名は軻、字は子輿、戦国時代中期の鄒(現山東省東鄒県)の人。孔丘の継承者として、儒家学派を代表する人物である。ここでは、孟子の言葉を引用している。『孟子・公孫丑』に「孟子曰：乃所願則学孔子也」(孟子曰く：すなわち願う所は、すなわち孔子を学ばん)。

² アリストテレスの『詩学』第一章。「史詩と悲劇、喜劇……これらすべて実際は模倣である。」

Moon！」¹と言ひ、窓外の晴れた海を見ながら、指さして「あ、海！あ、海！父さん、父さん、海！」といひます。僕は彼の二つの暗示を得て、以前『新月と晴海』という詩を作りました。

(一)

息子は 新月を見て、
遙かに 大空を指す。
我が子の魂が すでに飛び去り行き、
広寒宮の中 戯れ遊んでいるのを知った。

(二)

息子は 晴れたる海を見る、
息子は 海の波音をまねる、
わが子の心が まさに流れ揺れ、
血潮が海の波とともにあるのを知った。

僕から見れば、僕のこの二連の詩は、どうしても息子の詩の感情のこもっているのには及びません。

詩の原始細胞は、ただ単純な直観、さまざまな気持ちたちが融合し渾然一体となった情感です。人類が徐々に文明化し、個体の頭脳もようやく複雑になり、各種の直観、情感を分化、繁殖させようとし始めると、詩の成分の中に、更に想像が生まれてきます。一つ余り適切ではない例で譬えますと、直観は詩の細胞の Kern²、情感は protoplasma³、想像は Centrosoma⁴となります。詩の形式に至っては、ただの Zellenmembran⁵にすぎません。これは細胞質中から分泌して出てきたものです。

近ごろ、僕は詩の一元論の方に傾いています。僕の思うに、詩の創造は「人」を創造することです。言い換えれば、すなわち感情の美化(Refine)にあります。芸術の訓練の価値は、ただ感情を美化することのみで成立するものです。他者がすでに作った形式はそのまま援用してはなりません。他者が作った形成は自己にとっては何だの監獄でしかありません。形式の面では、

僕は絶対的な自由、絶対的な民主を主張しています。感情を美化する方法ということになりますと、僕は、君の主張している。(一)自然の中での活動、(二)社会の中での活動、(三)美的感覚の涵養(君の言う、音楽絵画の学習、天才詩人の詩を多読する項目など、すべてこの中に含まれます)、(四)哲理の研究、この四つはすべて必要な条件だと思います⁶。これ以外に僕にはさらに余計な言葉を加えることはできません。

こんな長い話しになってしまいますと、論を結ぶことができなくなります。僕はやはり自分自身のことで纏めることにします。僕の詩の形が美しくないという事実は、まさに僕の感情がかつて美化されたことがないからです。今後、僕は「人」を造るのに努め、これ以上詩を乱造しないことにします。人としての完成がなくて、どこに詩がありましょう？

「Art is a jealous thing, It requires the whole and entire man.⁷」とミケランジェロ(Michael Angelo)が言っています⁸。

おお、芸術よ(Oh Art!)！おまえは本当に jealous thing だ、おまえには恐らく僕のような人間は必要あるまい！白華！君も恐らく僕のような人間は必要ないのでは？

沫 若 九、二、十六夜

【民国9年、大正9年、1920年】

補注

本文は『三葉集』に収める、郭沫若の宗白華宛書簡2通の翻訳である。底本、注釈は前回と同じで、『三葉集』(田漢・宗白華、郭沫若著 上海書店刊行1982年6月)を底本とし、脚注部分は『郭沫若全集』文学篇 第15巻(人民文学出版社 1990年7月)の孫玉石(北京大学教授)注に従った。ただし、一部

⁶ これらの主張は、宗白華の『新文学の源泉』に見える。1920年2月23日の上海『時事新報・学灯』に発表した。

⁷ 英語で、「芸術は、嫉みやすいもの、全体的な、そして全面的に完成した人間を求めるのだ。」

⁸ Michelangelo buonarroti(1475-1564)。イタリアルネサンス期の画家で、彫刻家、建築家と詩人。代表作に、彫刻『ダヴィデ像』、大型壁画『創世記』、『最後の審判』などがある。

¹ 英語で、「あ、お月さま！あ、お月さま！」

² ドイツ語。『沫若文集』は「細胞の核」と訳す。

³ ドイツ語。『沫若文集』は「原形質」と訳す。

⁴ ドイツ語。『沫若文集』は「染色体」と訳す。

⁵ ドイツ語。『沫若文集』は「細胞膜」と訳す。

内容を改めたり、増やした箇所があるのも、前回と同様である。

本文中、背景の説明が必要なものを以下に「補注」として掲げておく。

1. 宗白華の1月30日付手紙は「你的旧詩、你的身世、都令我凄然」という語で結ばれていて、それを受けている。「旧詩」は具体的には、前回訳した1月18日付の手紙に引く「尋死」「夜哭」「春寒」を指す。
2. 1月7日付の手紙で宗白華はゲーテの「天上の序曲」をすばらしいと褒め、郭沫若に翻訳するよう勧めている。郭沫若の翻訳はそれを受けて行なわれたのである。
3. 1月7日付の手紙に、宗白華は『エッケルハルト』の読後感を次のように書いている。「昨夜も『エッケルハルト』を一通り読みました。とても楽しく、その後段に書かれた Resignation (隠退) は、僕に一種の解放、超脱の安寧を与えてくれました。僕は今も一人で人跡のない森林に入って行き、かつて無意識に抱いていたさまざまな思い上った熱望を悔い、再度一種の穏やかな適当な、小さいが実際の小事業に専念したいと熱望しています。」
4. 1月7日付の手紙で宗白華は「ゲーテの人生観と宇宙観」という論文を執筆しようとしているが「自分の手元には何の参考書もない」「ここにはドイツ語の本が極めて少ない。日本には新しい本の入荷がないのか。哲学、科学、文学、芸術の本を多く目に買いたいので、留意してほしい」と書いている。
5. 『三葉集』の日付のない郭沫若宛て宗白華の手紙(以下Aとする)に、「時珍が来て、君たちの昔の騒ぎを教えてください」とあり、「僕の思うに、過ちのない人間などいません。若い時は一時の感情に駆られて、とりわけ常軌を逸したことをやりやすいものです。僕はこれまで、誰かが間違ったことをしたら、悔い改めさえすれば、またいくらかのいいことをしさえすれば、それで帳消しになる、と考えてきました。人類はみな過ちを犯して

います。向上しようと改め、向上する衝動さえあれば、いい人間なのです。時珍も同じ考えです…」と続けている。この時期の郭沫若とその仲間にとって、生きて行く過程でどうしても犯してしまうさまざまな人生上また人性上の「罪」をどう考え、どう処理するかが大きな問題だったことが伺える。旧道徳を否定したものの、それに代わる新しい道徳はまだ確立していなかった。いまから見れば、やや子供っぽくさえ見える問題も、五四時期の青年たちにとっては解決を求めて模索する対象だったのである。

6. 宗白華は1月18日付の郭沫若の手紙を『学灯』に掲載したが、それは郭沫若の了解を得たものではなかった。Aの中で宗白華は「君のあの長い手紙を、なんと君の許しをえないまま発表してしまいました。僕を責めないでほしい」と書いている。ここはそれを受けている。
7. 宗白華はAで、郭沫若の「鳳凰涅槃」のような詩想壮大な作品を高く評価すると同時に、小詩も悪くないと褒めている。しかしそれは「完全に僕の直観的感想にすぎない」と述べ、根拠のない直観的な把握に否定的な感想を漏らしている。そして自分は直観に反対しているにも関わらず、実際には中国の詩詞に直観的な感想をもつことが多いとし、「これはいわゆる中国人の遺伝的な文学の頭脳」だと書いている。「中国人の遺伝的頭脳」というのは、それを受けて言っている。
8. 宗白華はAの中で自身の詩の定義について「僕があの『新詩略談』の中で「詩」に下した定義は余りにも薄っぺら(原文は「泛」)すぎた(散文も含む)」と書いている。「新詩略談」の詩の定義は以下のようなものである。「私は詩の内容は二つに分けられると思う。つまり『形』(形式)と『質』(内容)だ。詩の定義はもともと『美しい文字で人の『意境』(思想感情)を書き表すもの』だ。この書き表せる、適切な文字こそが詩の『形』であり、表現された『意境』こそが、詩の『質』である。言いかえれば詩の『形』とは、詩の中の音節と語句の構造であり、詩の『質』とは詩人の思想感情

にほかならない」

＊本文を含めて訳者注として書き加えたものを
【 】内に記した。

＊郭沫若文中の難解な中国語の語彙について、熊本
学園大学・石汝傑教授のご示教を賜った。ここで
ご厚意に感謝申し上げます。

解説: 本文の翻訳について (岩佐昌暲)

本文のポイントは郭沫若の初期の詩論が提起されていることだろう。前回の書簡では「詩不是“做”出来的只是“写”出来的」(詩は「作」って出来るものではない。宇宙に目に見えない形で存在しているものを「書」きとってできるものだ)という詩観について述べられていたが、今回の手紙では、もう少し一般化された詩観が述べられている。それらは体系的な形で展開されたものではなく、断章と言っていい形で、手紙のあちこちにちりばめられている。いま、それを取り出せば、以下のようなものである。

1. 詩は「情感の自然な流露」であるべきだ。
2. 詩の本質は抒情である。
3. 詩は形式としては自由、民主である。
4. 詩は「人間」としての完成の上に成立する。

このうち、郭沫若が最も力をこめているのが、1の「詩は情感(原文は「情緒」)の自然な流露」という主張である。この書簡では、「情感の自然な流露」が「人工的な技巧」と対比されている。「人工的な技巧」と訳したものの原文は「矯揉造作」であって、『現代漢語詞典』は「形容過分做作, 極不自然」と解説している。また、この語の英文訳は「artificial」(人工的な、無理につくった、わざとらしい)「affected」(気取った、気障な)である。要するに情感の「自然な流露」に反する表現を言うとは解してよからう。

2の「詩の本質は抒情」というのも、同じことを述べている。外界の事物に触れたときに呼び起される情を述べるのが抒情であるとするならば、技巧

をまじえず、その感情を素直に流露するということだが、詩の生成の本質である、と郭沫若は主張するわけである。彼が、原始人と幼児の発語を例にして、そこに詩の手掛かりがあるといい、それに続けて、原始人も幼児もあらゆる環境の前では、「新鮮」(中国語では、「新しい」意味にも「珍しい」という意味にもなる)な感覚があれば、その感覚から一種の抵抗しがたい情感が生み出され、その情感が一種のメロディをもつ言語となるが、この言語の生成は詩の言語の生成と同じなのだと述べているのは、「情感の自然な流露」の具体的な説明にほかならない。

3の「形式」についての主張も、その根っこは実は同じである。ここでは形式を「他人がすでに作った形式」とし、それをそのまま踏襲してはならない、他人が作った形式は、自分にとっては「牢獄」でしかない、と述べている。「情感の自然な流露」を重視する立場からすれば、情感の流露にふさわしい形式が自ずと出来てくるということになる。すでにある既成の形式に、自然にわいてくる情感を流し込むことは、それを「牢獄」に閉じ込めることにほかならないわけである。形式に関しては、絶対的な「自由」「民主」を主張する所以である。

4は、1～3までの主張と一見無関係のように見える。だが、「情感の自然な流露」が「詩」になるためには、「情感」そのものが「詩」的なものである必要がある。そのような「情感」は、しかし自然発生的に生れるものではない。それには「感情の美化」という芸術的な訓練が必要であり、そのような訓練には、宗白華の言うような、自然や社会での活動や、絵画、音楽、天才詩人の作品の多読による美感の涵養、さらに哲学的研究などが含まれる。こうした鍛錬を経て、「人間」として全面的に発展し、完成した存在こそが、すぐれた「情感」を具え、その情感の自然な流露が「詩」となるのだ、というのが、4の発言の基盤にある発想であるように思う。

郭沫若は1月18日付の宗白華宛書簡で、詩を「詩＝(直感+情調+想像)＋(適切な文字)」という式で表し、(直感+情調+想像)に「Inhalt」(内容)を、(適切な文字)には「Form」(形式)と

いうドイツ語を配して、詩の内容を表現する「適切な文字」が「形式」だと説明していた。そして、

「このように見ますと、詩という概念に含まれる属性からは人と芸の問題が生れます。『Inhalt』(内容) はすなわち人の問題、『Form』(形式) はすなわち芸の問題です。」「君は僕に、こう教えてくださいました。一方では大いに自然と哲理に接近して、円満で高尚な『詩人の人格』を涵養すること。もう一方では、古今の天才の詩の中にある自然な音節と自然な形式をよく研究して、『詩の構造』を完全なものにすること。白華兄！君のこの二つの言葉を僕は本当に骨身に刻んで忘れません！」と続け、「円満で高尚な人格」が詩の内容をもたらし、「古今の天才の詩」の研究が「形式」の進歩をもたらすという道理を、宗白華の手紙から学んだと述べていた。4の主張は、前便で述べたことを「情感の自然な流露」という詩観に基づいて、もうすこし整理したものと言えよう。付言すれば、詩が完璧な人格から生れるという考え方は、多分に中国の伝統思想、とくに儒教思想に由来するもののように思うが、どうであろうか。

「人間として全面的に発展し完成した存在」として、郭沫若は外国人としてはゲーテを、中国人としては孔子を念頭においていたようである。前回訳出した宗白華への1月18日付書簡で、郭沫若はこの二人についていろいろ述べた上で「孔子とゲーテらは本当に『人の中の至人』『人間の中の最高の人間』だと言える」「彼らの靈魂と肉体は両方ともすべてが完璧な地点まで発展しました」(55頁)とまで述べていることから、それが分かる。ゲーテへの傾倒は、郭沫若だけのものではなく、宗白華にも田漢にも共通したものであった。

この翻訳の作業の経緯は前稿(「我的作詩的經過」『三葉集』その1)と同様である。(2014年1月)